

かわさき 図書館だより



図書館ホームページ：<http://www.library.city.kawasaki.jp/>

読書の喜びを皆様に ～国民読書年を経て、これからも本の世界へ～

川崎市立図書館では、皆様に読書の素晴らしさを味わっていただくため、講演会、講座、おはなし会、朗読会などの各種イベントを開催しています。

また、児童向けの「かわさき子ども読書100選」「ヤングアダルト向きブックリスト」や「地域資料新着図書案内」、川崎フロンターレとの協働制作の「川崎フロンターレと本を読もう！」などのブックリストを配布したり、各図書館で企画展示を行うなど、多方面で取り組みを行なっております。

ここでは、「かわさき読書週間」（平成22年10月31日～11月14日）のころに開催したイベントから一部をご紹介します。



国民読書年記念 読書普及講演会

「北村薫の 読む喜び 書く楽しみ」／川崎市立図書館

12月10日（金）に、直木賞作家・北村薫先生をお招きし、利用者アンケートからの質問を中心に対話形式で語っていただきました。

ご自身の幼少時の読書体験からはじまり、大人でも味わえる読書の喜びや醍醐味、「胸のうち」を人へと伝える創作の奥深さまで、お話しくださいました。

朗読CDを引用され会場全体でその内容に耳を傾けたり、先生の朗読で翻訳を聴き比べるなど、興味深い切り口で進められました。

北村先生の味わい深いしっとりとした語り口の中にも、時おりユーモアを交えながらの講演内容に、来場者からは、「読むことの喜びや幸せを再認識することができた」「読書や人生の新たな楽しみが増えた」「読み手の多様な価値観を認める先生の考え方を聞き、更に読書経験を積もうと思った」などのご意見をいただくことができました。

～北村先生の言葉から～

「書く」（創作する）ということは、その「胸の中にある思い」を「相手の胸に伝える」ことである。その表現方法は様々である。

一方で本を「読む」ということは、受け手の解釈によって変化し、年齢によって解る事があったり変化することもある。だからこそ読書は面白いのです。

とよたかずひこ氏講演会

「絵本づくり いっしょ けんめい」／多摩図書館

10月30日（土）『どんどこももんちゃん』シリーズでおなじみの絵本作家、とよたかずひこ氏の講演会を「たまく絵本の会」と共同で開催。当日は悪天候にもかかわらず、たくさんの方々にご参加いただきました。楽しいエピソードを交えながら、絵本作家になられた経緯、『でんしゃにのって』や『ワニのバルボン』シリーズ誕生についてお話しいたき、紙芝居や手作りの大型絵本の読み聞かせもしていただきました。

子どもたちとの触れあいをとても大切にされる、とよた氏の優しいお人柄が感じられる講演会となり、心温まる時間を過ごすことができました。



大人のための朗読会／幸図書館

毎年、読書の秋の恒例行事となっている幸図書館の「大人のための朗読会」。13回目となる今回は、11月13日(土)に幸市民館の音楽室で行われました。「レザミ」の皆さんは朗読歴15～20年というベテランですが、この日は、短編小説のほか、童話、詩、エッセイなど多彩な演目で朗読の世界を楽しませてくれました。それぞれの個性が光る朗読に、参加者の皆さんからは、「生の声で朗読を聴くのは楽しかった」との声が寄せられました。



朗読の力で大人の方を別世界に引き込んでくれます。



こんなに素敵な作品が完成☆

親子で科学の玉手箱～万華鏡をつくろう～／高津図書館

今回で2回目となるこのイベントは大好評で、受付開始わずか30分で申込を終了しました。当日の10月24日は、5歳から小学3年生までの子ども達がお父さんやお母さんと一緒に参加し、万華鏡を作りました。頑張った後はどんなふうに見えるか覗き、子ども達はキラキラ万華鏡に大満足！また、講師の上原さんから光のしくみの説明があり、みなさんで勉強タイム。最後に「がんばったで賞」の修了書が手渡されました。休日のひとときを親子で楽しんでもらえました。

国民読書年を経て、これからも川崎市立図書館は読書の喜びをお伝える橋渡し役となり、お子様向けから大人向けなど、幅広い世代の方楽しんでいただけるイベントやサービスを展開していきます。是非、図書館へお越しいただき、本の世界を楽しんでください。



第15回

～川崎の歩みとともに～

歴代川崎市長の本



このコーナーでは、川崎をもっとよく知り、もっと楽しむための本を紹介しています。第15回目は、歴代川崎市長に関係する本を集めました。大都市川崎の歩みを多様な観点から考えていただけるのではないのでしょうか。

『金刺不二太郎先生を偲ぶ』【金刺不二太郎先生を偲ぶ会】

＊金刺不二太郎：昭和21年～46年在任

金刺氏の追悼文集。各人2～3ページほどの追悼文には、生前の金刺氏にまつわるエピソードが凝縮されており、そこには氏の人物像だけではなく、「戦後」という時代の様子も描かれています。



『ノミとカナヅチー人間都市づくりの10年ー』伊藤三郎／著【第一法規】

＊伊藤三郎：昭和46年～平成元年在任

「ノミー丁とカナヅチー丁で地味に積み上げて行くのが地方自治であり、焦れば必ず失敗するんです」という発言から「川崎に青い空と白い雲を」の環境問題まで、市政の問題が広く取り上げられています。



『川崎の挑戦ー21世紀へのメッセージー』高橋清／編【日本評論社】

＊高橋清：平成元年～13年在任

前市長の対話が集められています。「共生のまち」「市民協働」「産・学・官連携」などのキーワードから川崎の「挑戦」が語られています。



『川崎再生への軌跡と元気都市への道 阿部川崎市政の八年』

ワークプレス株式会社／編【多摩川新聞社】

＊阿部孝夫：平成13年～在任

「川崎再生元年」が掲げられた施政方針「川崎の再生と市政改革」からはじまり、行財政改革プラン、市基本構想・新総合計画、自治基本条例、新総合計画・第2期実行計画、住民投票制度まで、現市政の道程を具体的に知ることができます。



平成22年度読書活動優秀団体

「読書のまち・かわさき」事業では、毎年、かわさき読書週間に読書活動優秀団体（個人）の表彰を行なっています。平成22年度は、瀬川成躬氏（個人）、川崎市立藤崎小学校図書ボランティア（団体）、おはなしくまさん（団体）が、学校や地域での読書活動推進に大きな貢献を果たしたとし、表彰されました。ここでは、川崎市立図書館を主な活動拠点としているボランティアグループ「おはなしくまさん」について、その活動の一部をご紹介します。



「おはなしくまさん」によるおはなし会は平成2年、市民館の成人学校「手袋人形をつくろう」の受講生に図書館から声が掛かったのをきっかけに、その活動は始まりました。当初は5人のメンバーでのスタート、それ以来20余年、中原図書館で毎月第3水曜日のおはなし会は続いています。

グループ名の由来はエリックカールの絵本『くまさんくまさんなにみてるの?』から。絵本の読み聞かせ、手作りのパネルシアター、エプロンシアター、時には人形劇と多彩な内容のおはなし会は毎回好評で、会場は子どもたちの笑顔に包まれます。



「それぞれができることを無理せず楽しく気軽に参加すること」が長く続いた秘訣とのこと。今では11名で活動中、メンバーに共通するのは絵本が大好き、子ども達の笑顔を見るのが大好きということ。これからも子どもたちに絵本の楽しさを届けてくれることでしょう。



フロンターレ選手が選ぶ「わたしの1冊」

わが川崎のサッカーJ1チーム「川崎フロンターレ」と図書館との合同企画です。第5回目は、小宮山選手が選ぶ1冊を紹介します。



『不動心』 松井秀喜／著 【新潮社】

《あらすじ》 2006年の左手首骨折から、復帰するまでのエピソードを皮切りに、高校時代の甲子園での経験、巨人時代の監督との思い出などを記す。「広く深い心」と「強く動じない心」を常に念頭においた、著者の自己コントロールについて明かされる。

*** 小宮山選手より ***

人生良い時も悪い時もありますが、たとえ辛抱の時がきても、自分の軸がブレなければきっと乗り越えられるということを教えてくれた1冊です。迷った時、苦しい時に読んでいます。そうすると初心に戻ったように、進むべき方向が見えてきます。

【DF8 小宮山尊信選手】

2010年からフロンターレに加入した左サイドの職人。アグレッシブな攻撃参加からのクロスに加え、中に切れ込んでのミドルシュートも魅力のひとつ。左サイドを疾風のように駆け抜けチャンスを創出している。本の主人公に自己投影させたり、読書で自分磨きをしたりと、日常の習慣として読書にいきそんでいるとのこと。



今年度も川崎フロンターレとの共同でブックレット「川崎フロンターレと本を読もう!」が完成しました。あの選手お薦めの絵本や、イチ押しの1冊など、内容が盛り沢山です。各図書館にありますので是非お手にとってご覧ください。



かわさき歴史めぐり (23)

徳川氏の関東入国と川崎市域－23－

法政大学名誉教授

村上 直

江戸時代の川崎地域の村むらの生業は、農業の米作りが中心で江戸近郊農村として発展したといえます。

村むらの概要を記した「^{むらめいさいちょう}村明細帳」によりますと、江戸時代後期から幕末・維新时期にかけて耕地には水田による米を作り、裏作には麦を作っていたと思われます。また、畑では大麦・小麦・大豆・小豆・粟・稗・そば・菜・大根などが自給用として生産されていました。こうした農業生産のようすは、東南部の海岸地帯を除けば、市域の村むらにおいては大きな相違はなかったとみられます。

また、『新編武蔵風土記稿』によりますと、川崎市域が含まれる橘樹郡には、塩や梨、都筑郡では柿（禅寺丸）に炭（黒川炭）が特産物としてあげられています。

江戸時代の中・後期になりますと、巨大な都市である江戸の武家、町人の消費を賄うための物資の供給を行う、いわゆる江戸地廻り^{えどじまわ}経済圏が形成されていくことになりました。

こうなりますと水田・畑作の純農村としての川崎市域でも、農業のかたわら商業を営むものたちも増えてくるようになります。それを農間渡世^{のうかんとせい}とか、作間稼^{さくまかせ}と呼びますが、特に街道や往還、河川の周辺には多くみられるようになりました。

こうして、地廻り物の生産や農間渡世が行われるようになりますと、村びとの生活も次第に変っていくことになりました。つまり、単純な農村生

活から多様な日常生活へと変わっていくことになったのです。しかし、市域の人びとの生活を支えたのは何ととっても「稲毛米」の呼称によって知られた稲の栽培と収穫であったといえましょう。それは田方と畑方の比較からもうかがえますが、多摩川（玉川）と鶴見川の水系の河川と共に、大丸用水、稲毛・川崎二ヶ領用水が重要な役割を果たしていたといえます。

さて、川崎市域の稲作農業は古くは弥生時代の中頃から行われたといわれています。市域のムラは台地上のちいさな谷を臨む場所に散在していたことから、水田ではなく^{おかぼ}陸稲であったとみられています。やがて古代社会になりますと水田の米作りになりました。平安時代末期、承安元年（1171）に市域の荘園（貴族や寺社の私有地）の一つである稲毛本荘の田地の面積などを調査した報告書（稲毛本荘検注目録）によりますと、稲毛郷・小田中郷・井田郷の三つの郷名が存在したことが分かります。その稲毛郷の地名は、現在の中原区内の春日神社が鎮座する^{みやうち}宮内の付近とみられ、多摩川の近くの平地には開発された水田を中心とした稲毛本荘の荘園の一部があったといわれます。恐らく灌漑用水路もかなり整備されていたと思われます。

また、鎌倉時代初期には稲毛荘を支配した、幕府の有力な御家人^{ごけにん}であった稲毛三郎重成などもいたことから、「稲」や「田」に関する地名や人名も見受けられました。

編集・発行 川崎市立中原図書館 〒211-0063 川崎市中原区小杉町3-417 TEL044-722-4932

川崎市立図書館：

川崎図書館(200-7011)	高津図書館(822-2413)	麻生図書館(951-1305)	大師分館(266-3550)	橘 分館(788-1531)
幸 図書館(541-3915)	宮前図書館(888-3918)		田島分館(333-9120)	柿生分館(986-6470)
中原図書館(722-4932)	多摩図書館(935-3400)		日吉分館(587-1491)	菅覧所(946-3271)